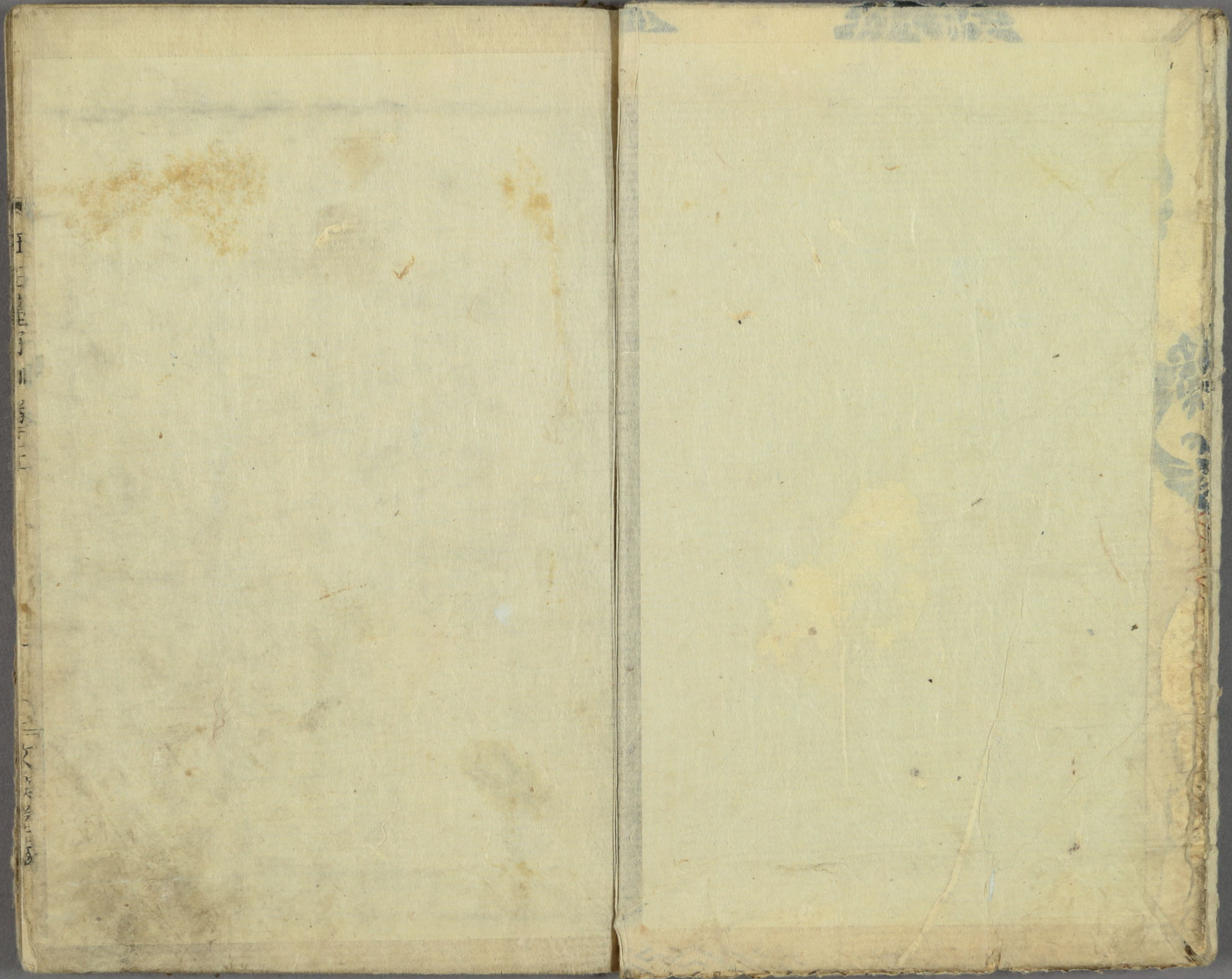




新局玉石童子訓

五





新局玉石童子訓卷之三上冊

東都 曲亭主人人口授編

第二十五回

陰徳陽報如如来極道守く
積善天感落葉其實と賜ふ

再説十三屋九四郎ハ當日杜四郎成勝ハ絶て久し治比の信弘元風濕病
臥の。且教訓の言の顛末又贈れ金子の支音就基綱の上又の言詳お修
示して弘元の授る一書と取出て遞與る。杜四郎ハ今始て知る父の疾病痛
母の逝去大兄與元親子の早逝支又母胸淡れて漫涙の進む見其
書と屢兼戴たて歎息あむ且思ひ治比ハ不幸かゝの如くなり。斯
の女もあて啞言ハ似れも俺薄命の致と所欽影呂歳少々實母ハ目
喪ひも幾程も外祖又母と世と去て今ハ安藝を親弟兄ハ會目まふりとの

思ひ小大兄も命長からど況や大人の疾病臥ぬぬと空くから廻る身と死の
縦去向の幾百里雲と水と隔るも一舟の舟便り求めて瞬間小彼御許へ参り拜
見せぬのあら後悔も思ふも何とぞ及ん然らぬがういせし御教訓の重かる小今一
人の功をくても那里へ参りながら悲しめると聲立て泣ぬ位に増る孝子の心思
汲九四郎こそと慰めぬ其御歎の理りから大人の欠安の大病るぬ療薬必経
験ありて竟る瘥りぬる人路費の金も賜りたる其毛の權且思ひ復し来を
わて東の方小武者修めぬる大人の教の情る直る後に見参り安かすとの小
乙藝も云々と詞を添て諫れ四郎の僅小點頭て現小行ぬ行も従も親の教小従
ふと孝子の道とのいれぬも這一通の俺兄の代筆も大人の賜書と兼見
参の心地をまるくそくとのいれぬも又一書と戴て封皮を折きぬる折る程然
として外面より這方と投て来る者ありこ見れば一個の老女の年齢六十近と

袋脛衣己の時る夏衣るがら装の貧りからる打扮を縷子の前帯裳
短多副帯さる精悍く後方吊せし轎子の轎夫兩名従ふて十三屋の店前へ来
は暖簾と瞻仰見て這里へけりと單領く老女荒余小揖讓くと卒余も問は
り九四郎主の宿所小在と云と四郎の見えらと折方かりと父の書と開が儘懐夾で
急小身と起り避て奥へ退りける當下乙藝の端近く件の老女と立迎て那里より
欽知度ゆれど訪せぬ九四郎の西へ旅宿の日數歴て今日から東へ宿所小在の櫛の御
用やめと問復されて嬉しやる鏡めと徐小草履と其果脱措て赤登れ九四郎
も訝りる膝と找めて訪せぬ屋主人十三屋九四郎の咄も小こをいれし何れ
より来りると訝り問へ點頭ても面善ゆめゆるぬ地押々おけるるるるる
たく思れぬ奴家の目裏小這御宿所小在りと云え大和の旅客末朱之小由縁
上市る落葉小ゆりと名告小敬驚く九四郎乙藝思ひけるる開はとを其里の

平端近也。御話説と听ゆる不宜一から。且這方へと右ひらり。上坐請居。二枚
 折る小屏風と建て片象る客儲。二藝の店舗の火般。真鍮鑿鑿拵
 試て温茶汲合る。甬茶碗茶托尋てうち載て卒とむる。小鷹が受戴。けり
 備置て。原来御身の九四郎主の御對偶。二藝刀自。どの。さる。於。とら。れて。二藝の
 あり。と。ゆ。え。二。執。云。即。奴。家。は。は。ら。幾。の。程。多。知。ら。れ。故。こ。そ。あ。ら。の。と。訝。れ。九。四。郎。の
 俱。小。の。今。朝。旅。より。還。り。て。入。侍。の。御。身。の。度。彼。朱。刀。祢。と。幾。番。飲
 救。い。ぬ。り。慈。愛。良。善。及。び。く。と。思。ひ。の。今。日。梅。家。小。來。ま。え。と。の。神。る。取
 身。の。知。ら。ざ。り。た。と。の。落。垂。れ。又。點。頭。て。开。其。該。で。ゆ。か。奴。家。こ。と。這。頭。ま。出。て
 來。ご。う。思。ひ。ざ。り。一。近。曾。御。身。の。宿。ま。あ。ひ。る。朱。之。女。の。俺。女。塔。背。ま。り。の。ひ。の。る。さ
 浮。薄。の。本。性。を。知。ら。ざ。る。あ。ら。ね。ど。も。已。か。た。情。由。あ。り。て。當。春。春。東。西。と。買。せ。ん。と。
 京。師。の。こ。の。遣。志。一。小。夏。蘭。る。ま。か。へ。る。遊。真。の。癖。又。起。り。て。那。金。子。と。も。ご。り。る。

喪。い。や。ま。ら。ん。と。猜。志。の。と。大。和。の。家。も。慨。あ。ら。こ。ま。ら。ち。歎。て。の。ま。在。り。け。程。不
 い。目。浪。速。の。陣。館。より。御。使。と。下。さ。れ。て。猛。可。奴。家。と。召。せ。ぬ。思。ひ。け。る。と。さ。れ。ら。ち
 敬。馬。た。り。養。る。朱。之。女。の。一。毛。之。圍。守。も。告。ら。れ。守。り。も。亦。御。下。知。あ。れ。一。等。あ
 る。時。誼。を。付。り。毛。留。守。の。故。老。隣。人。の。老。實。る。小。憑。在。り。て。其。次。日。の。早。日。村。長
 刀。祢。俱。せ。ら。れ。て。上。市。の。家。と。立。出。り。二。日。二。宿。と。あ。り。炎。暑。小。堪。ぬ。今。日。午。の。時
 候。俱。小。浪。速。お。ま。よ。け。れ。躬。て。陣。館。へ。参。上。り。ま。と。局。の。内。召。せ。ら。れ。て。頭。の。殿。職。善。御
 出。坐。在。り。有。司。不。讀。せ。て。せ。せ。ぬ。朱。之。女。が。越。度。の。條。々。其。顛。末。を。創。て。知。り。ぬ。朱。之。女。の
 這。十。三。屋。と。宿。小。て。在。り。ま。目。今。様。と。歎。喚。做。る。娼。妓。の。自。殺。小。更。起。り。と。那。身。の
 ち。え。宿。の。内。室。に。藝。刀。自。文。乾。見。達。而。三。名。敷。系。累。せ。ら。れ。て。久。く。獄。舎。小。敷。系。れ。小
 九。四。郎。主。の。舍。弟。る。勇。少。年。の。禪。死。を。鐵。屑。と。歎。公。騙。賊。の。下。の。夜。盜。と。兩。名。を
 捕。捕。ぬ。い。か。其。強。盜。等。の。招。了。也。今。様。が。自。殺。も。知。ら。れ。又。朱。之。女。も。九。四。郎。主。の

鐵屑が支黨するの證も其里小達一が頭の御疑情解て刀自と兩個の乾見録。
 今朝共侶小赦あつて宿所小還りぬひの。開が中朱之次ハ舊悪多ふらうまて。這
 時既小すえか。更罪と被りて大和へ返されむ背と二百鞭せて東へ追放せらるる。
 まて其條々小備るに有司達讀果る時頭の殿宜ふら落葉侘が慈善る。俺
 間謀見ども。豫具小知りたれ侘と口よせり別茂小あら。量朱之次ハ盤纏
 幸と九四郎小預けりと九百九十五金ハ朱之次ハ有財る。侘侘が沙金と唐
 布と買見とも朱之次ハ通與らる。金子ある故小没官せむ。侘返り取ると但一其金。
 故二百兩にける。五兩ハ朱之次ハ路次の約儀ハ使減し。うとのひ。這茂をとり存せよ。
 とみづら仰渡さきて件の金子と賜り。感もる畏さ。一乘時退りて長刀袷の
 加印の美書とまらせり。事立地小着落して身の暇と賜り。於是初て知り
 ける。刀自達三名の冤屈の罪ハ俺女背朱之次ハ所以ハ。俺身料らむ。這地小來る

宿所と訪ふて勸解もせむ。朱之次ハ房錢の債もあらを償て。大和へ還りぬれんや。
 と思ふ。村長刀袷小告て浪速小宿投て一乘時這身の暇と請を。吊せり。轡おらも
 乗り。方僅這頭へ来て。すげ九四郎主ハ今朝ハ安藝より。か。來ませり。と。人ハ誨ふ。
 便すか。ね。さ。を推参ま。ゆり。と告る。詞の流る。汗も納れ。夕風よりも
 憑一。思ふ。心と。僅小。知る。御身の誠心違さ。一。不思議の對面俺們
 三人ハ罪饒されて。世間廣くる。け。人なる。追放されて。往方も知らる。ぬ。心
 苦一。思ひ。の。救ふ。く。も。あら。と。九四郎推禁。ゆ。落葉が實美を謝て。家
 中。初。俺。朱。刀。袷。を。家。小。留。り。の。故。ある。と。那。人。の。俺。隣。る。岸。松。屋。を。宿。せ。ん。と。左
 界。より。來。け。る。小。其。岸。松。屋。他。郷。へ。徙。り。て。這。地。小。あ。ら。む。做。一。か。左。界。の。人。と。約。束。さ
 る。宿。違。ひ。て。便。す。と。い。ふ。ら。う。ち。も。置。れ。む。其。隣。る。故。も。て。只。得。俺。家。小。留。り。知
 又。那。百。九。十。五。金。ハ。酒。家。安。藝。へ。赴。く。折。朱。刀。袷。より。預。し。て。藏。置。せ。り。小。幾。程。も。

福更起りて件の金子と陣館へ召されて出處と鞆向あり故の主るればとて御身返賜
す。是切ももの工さる。俺豈今や那人の房錢を欲せんや。皆是時の不幸也。乙藝六
市四摠等と一旦連累せられたるも。怨むればとあらば。那人の心術の好もあれや。あれ
俺誠心とて。權且家小留め。毎軒や。那人追放せられて。鏝一文の盤纏も。あるを救
俠者ふあまと思ひければ。俺弟茶六とて。金五兩と贈らせんと。軒せり。あれも時の程
及及死や否と知らせ。又那二賊と生拘より。遂小疑獄と解け。掙たの弟茶六の功を
去。另小一個の勇少年あり。井川杜四郎成勝と喚做て。茶六と共。侶小松の孟林寺小寓居
志。郷向小訪来て。奥小存り。とのい々外面瞻仰見て。日た夜没て。黄昏より。乙藝六の燈を
出さ。や。喃大和の嬢。あつた。も。送小猶多かる。今宵の這里小留らせぬと。いふ
乙藝六共。侶小留守の程。福事と。櫛工も。炊爨又一個もあらむ。做り。か。然
せ。款待のゆるる。ねども。先夕饌と。あ。見。陝く。あれと。納戸。夜と共。小語りぬ。ねかと。

のうと。被敷て。不剛才。來。路。物喫。これ。欲。然。でも。ち。續。く。憂。
を。瘡。の。ま。治。を。自由。出。れ。れ。も。夕。風。と。吹。令。這。里。小。の。儘。置。れ。と。下。さ。管。待。
る。は。れ。ら。九。四。郎。諾。て。今。宵。の。情。由。を。村。長。刀。祢。小。告。告。不。便。の。ゆ。
ゆ。東。ま。否。他。の。浪。速。の。宿。所。返。と。今。宵。の。情。由。を。村。長。刀。祢。小。告。告。不。便。の。ゆ。
下。と。い。う。や。も。身。と。起。り。店。頭。へ。立。上。り。と。喚。せ。れ。店。舗。の。傍。の。轎。を。昇。屋。
主。と。俵。件。の。兩。個。の。轎。奴。の。心。と。合。て。來。り。け。と。落。葉。の。猶。も。近。つ。け。奴。家。の。這。里。小。所。
要。あり。一。夜。明。と。明。日。の。え。和。郎。連。の。浪。速。の。宿。退。り。と。由。を。長。刀。祢。小。告。告。明。日。又。朝。
風。奴。家。を。迎。來。よ。か。と。詞。急。迫。く。吟。附。れ。九。四。郎。も。勞。ひ。て。和。郎。連。大。変。小。あ。ら。ん。と。
え。酒。菜。の。き。れ。酒。の。あり。背。門。より。入。り。と。喫。ま。と。と。轎。奴。の。心。と。合。て。來。り。け。と。落。葉。
る。れ。欲。わ。ら。飯。の。剛。才。賜。り。及。卒。然。小。阿。懷。さ。る。明。日。又。迎。來。あり。と。告。別。を。し。
轎。を。拾。起。と。浪。速。の。歇。店。と。投。て。退。り。ける。當。下。九。四。郎。外。小。出。て。暖。簾。卸。ら

推買堂へ相招牌ふら乗て。開が儘店舗の片隅へ遠く合入れて戸を繰下を西三枚
都てら内由夏の夜の風も馳走の二蒸熱乙藝云の燈引提多て碟子小装做り葛
の粉餅掛一砂糖い夏の霜心も解け、数待態小煎茶の出飪汲更て何るられ
と是人も脚口取取と薦るを落葉の受ら戴てあちち措せぬまで御座會不
做りゆり這葛餅子を賜ふ吉野小近は俺家の夏を思ひ出されて常言の憂者
逆旅のそと涙暗む庖福の蚊遣煙の多て人を泣き神の露夜の席の蕭然の因談
時と程まあり姑且七九四郎の半く落葉のち向て前もひりまら杜四郎と来
六が御身の上と知りしはいさ上市へ赴て那百九十五両の金子の出処来歴を問質し
自他二件の疑獄と解し為るる小程の森寺新参者柿八と喚做と奴隷の故郷上
市へと噂えり他不就と朱刀袷の出処の虚実を問し、那人の放蕩を頼御身の慈善
徳受まで具小夢知るとして俱大和起りせんを準備とせける其夜又疑獄と解く

元照据とゆれば大和をむ做りける不反て御身小訪るゝ縁ある所以欣あも奇とゆふ
落葉の胆向ふ心の裏お思ふ。ち出て介のいえ小出越き波濤欲揮歌難。涙の
谷口龍でけり有恸る折る竊歩多。這店頭へ来る者あり是則別人をむ末朱
之从晴賢之他、昔悪の故りて御前陣館の雑兵二三名小追立られ去られて則
浪速の申明亭を开が儘小追放されて雑兵等かろ去りけり。介程小朱之友の罪解
屍人を免れられも既小追放の身と做りて。僅小錢一緡の盤纏もあるとるれば進退
其里小谷りてぬれぬやら路傍る。樹下小立よちて跪居て肚裏お思ふ。暑裏の俺
冤屈の罪あて宿の老婆乾見考も一旦獄舎小敷糸られも。俺做せる孽小あらん況や
他者の饒されて異なる家小返されれば俺を憐愍思ひもとも怨む死るあり九四郎
安井執事よりしてのまゝかろ来むもあれ老婆女乙藝小悲と請ふ。錢まれば金まれば借らんと
尋思を多路を易て執て返さる浪速を過りて住吉の里小来り程小既小七日暮



夏愛ホ丁りて
 禪師 杉木の
 家 小光臨ま

あまののち文
 八丁目見えり

その花あけのすけ。よひやま。まき。あせや。みせさ。あひま。ひたのこ。と。あひひ。ひのこ。つ。けり。當下朱之次。甲夜闇。紛れ。十三屋の店頭。小瀨。末。閉。送。したる。戸の。間。も。家。内。の。光景。を。観。念。思。ひ。さ。り。ける。九四郎。の。何。の。程。中。か。ら。あ。け。ん。乙。藝。と。俱。小。店。舗。在。り。奇。れ。い。又。只。是。の。ま。ら。で。大。和。る。落。葉。さ。え。主。入。夫。婦。お。う。ち。對。ひ。て。打。譚。あ。り。か。げ。吐。き。や。と。か。り。胆。落。れて。盡。る。ま。ま。と。思。ひ。の。こ。内。入。る。に。便。宜。る。な。げ。情。と。退。だ。て。呼。門。せ。ま。る。不。容。子。と。知。ま。く。欲。さ。ふ。這。店。舗。の。傍。る。拾。遺。子。と。情。地。下。と。柱。身。を。倚。せ。屍。ら。ち。撒。て。單。面。あ。る。耳。と。澄。し。て。王。客。ら。ち。相。譚。を。窺。聞。ま。そ。居。さ。り。ける。裏。面。あ。り。足。を。あ。ら。り。も。ろ。く。落。葉。の。屢。嗟。嘆。ま。て。九四郎。は。合。る。や。う。入。り。と。人。る。な。朱。之。次。の。禍。夏。故。知。る。よ。り。も。ろ。く。と。の。い。ち。ち。ち。尚。年。少。少。刀。祿。達。の。近。く。も。あ。ら。ぬ。俺。家。と。訪。ん。と。ま。で。准。備。あ。り。心。操。を。憑。し。れ。斯。い。や。暗。に。恥。と。明。々。地。に。做。ま。ふ。似。れ。と。朱。之。次。の。ま。い。も。柿。八。と。や。ら。が。話。説。也。知。ら。れ。て。馬。も。要。る。一。他。に。俺。姪。斧。柄。の。必。死。と。極。て。妖怪。を。對。治。さ。る。者。を。死。且。奴。家。が。伊。勢。の。阿。濃。の。津。に。遣。嫁。し。て。商。賈。の。妻。と。し。時。其。家。痛。く。衰。果。て。丈。婦。離。別。を。ける。折。其。年。

僅。小。五。歳。の。獨。女。見。余。泣。別。と。昔。里。を。れ。大。和。る。兄。松。木。斧。七。の。家。小。歌。り。在。り。程。斧。七。夫。婦。の。時。疫。也。共。侶。小。身。故。ら。送。る。姪。の。斧。柄。の。三。其。比。尚。稚。多。う。稍。守。育。長。と。成。く。好。女。婿。欲。得。と。徴。る。折。ら。朱。之。次。が。斧。柄。を。極。り。恩。愛。あ。る。ま。ら。他。の。俺。故。の。良。人。の。後。妻。小。生。る。獨。子。を。死。と。思。ふ。六。新。恩。昔。縁。兩。々。深。く。感。ト。思。ふ。故。小。漫。小。斧。柄。と。妻。甘。や。も。斧。柄。の。遂。小。有。身。て。五。月。小。做。一。今。春。朱。之。次。小。東。西。買。せ。ん。と。京。入。遣。一。た。り。け。る。久。く。も。あ。る。ま。を。か。ら。束。信。が。あ。り。と。な。れ。ば。斧。柄。の。を。苦。小。病。故。也。と。臨。月。小。做。ら。る。小。猛。可。小。産。の。紐。解。り。て。八。月。子。を。生。ら。死。其。生。一。と。男。兒。也。然。し。も。恙。い。ま。け。れ。も。只。痛。一。た。斧。柄。の。命。其。夜。急。瘡。也。身。故。り。あ。る。年。來。守。小。育。る。姪。あ。れ。と。実。子。小。異。る。を。思。ふ。老。小。身。の。頼。む。樹。下。小。雨。漏。り。と。袖。の。濡。き。真。愛。の。眞。愛。小。燈。ね。共。侶。小。死。と。さ。ら。あ。歎。け。や。一。日。二。日。と。辨。り。も。ろ。く。安。葬。も。甘。く。あ。り。ける。程。小。思。ひ。ける。死。如。如。來。様。の。六。田。の。葺。と。な。ゆ。と。這。頭。と。春。縁。を。受。け。と。

人多く俺門の立集ふと守り然慌惑と走り去り禪師様の御法衣の袖に携り
 斧柄が為し廻向と願ひまゝり一姑且錫と駐り俺家のまゝりおいて斧柄が
 柩の廻向あり且奴家論のむら約莫生と一活る物那生おれ這死の喪はれ
 ゆるる何ぞ哀そ何ぞ歎ん俺今量法語あり善女謹で聴聞せしむ
 ゆえ死しける女兒も其心貞實也悪心悪行といふも不幸かか如く俱前世の
 業報の今この悪報あらざれば死し清果とゆゑの如く又汝の女婿未朱之介の如
 於原是邪物の後の身縁の觸事小感と斧柄が必死を極しは是薩摩の寓る所
 其極の極あり及く是と殺せんと然るを汝が疎忽る初對面より誓の約
 束し悔もせぬ風く斧柄を妻せ他が邪淫小喪ひる主君の財貨を喪はせとく
 償得させしむ惑ひの三救心小不仗ま欲しく邪物の悪と肥赤其益を今を
 知る然朱之介小齋したる二百金も空花之生れ小兒も孫をぬと後悟るるわん

然りとせせと果敢るもて女僧お做らむ欲するも這家のく西羈お做りて今の本意と
 遂に好も可なり自然任し哀むるに歎くべし只愛惜の念と断て斧柄が
 こととされと教化一人町寧せのま告さる俺家ありありと見る如く知せぬ善
 知識の法語小教馬に且畏て合掌もて稟まや罪深より迷の雲も御教化より
 齊なり然る中朱之介小齋したる金二裏の斧柄が厄と救れり報恩の其一種を
 也他又遊興淫樂お使失ひされ惜不足らぬれも他が東の主君より仰せ来て
 来おける唐布百反と沙金五百兩と一のの開の禪師おまます造佛の為るり他淫
 樂お使捨て残る沙金二十包留る俺家お在り他尚那儘お這地へかへお做らせ
 件の沙金と遣かる其折々禪師様の受さるぬと願へ頭とち掉て造佛の
 是有漏の縁扇谷の情願と許さるり這故へれも汝が深信切義賞を乞ふれ
 其沙金柩に乗て斧柄が亡骸と俱瘞め其金後お世に見れて為る佛像を作る者

わらん。然へ扇谷朝貞の夙願を果さず不足るべし。必る疑ひそと論ら料紙硯と求む。則
 斧柄が法名と梅雪信女と命トゆひつ件の沙金と出させて。財囊の随ふ柩の上へ紐のて
 結付させ。又教ぬる。俺思ふ旨あれ。遣亡骸ハ六田川の邊へ拾はせ。俺庵近く
 葬るべし。是も縁あるところか。とのひつ四下と見か。のふ里の老弱百十數名。禪師と渴仰
 者。俱ハ這坐席へ稠入りて。圍繞して在り。禪師列々看且て。衆人目今俺為
 這柩と拾はせ。六田川の邊ハ葬れ疾々せよ。とのそが。のべ里人歎び羨む者なく。
 惴雄の壮佼五六名。合肩入れて拾はせ。柩ハ從ふ里の老弱皆後れ。とそ外ハ真禪
 師ハ錫杖衝鳴して。是を道す。のひける憶りる。野邊送。奴家ハらん一家兒
 不測の佛縁多哉。如来様と信する者も。腹黒。毎午遍百遍誦るとも。拜面と饒
 末のぞと豫す。るるも。ある斧柄が不幸死亡の折招ざる。不出りて。取合。里の衆

人ハ柩を昇せて。おとまりて。六田川の上る。御庵の傍ハ安葬せぬ。ハ過世あり。けは。供
 福也。歎け。中の歎ひ。最淡々。女子の浅智。量知。ゆる。活菩薩の教
 化。任せて。形貌ハ有。髮友の。優婆姨。とも。寧煩悩の。絆を断て。心ハ安養。極樂淨
 土。置。何ぞ措ざらんと。思ひ。復。歎。を禁。今ハ斧柄が。像見る。赤子の。為。乳と
 討。小。山。里。の。巫。の。所用。小。妹。母。と。徴。め。易。か。ま。折。新。町。敗。鍊。經。紀。釘。六。の。老。婆
 も。二。十。日。已。前。小。子。と。生。る。小。其。赤。子。ハ。亡。り。て。懷。寂。死。の。と。る。乳。房。盈。て。堪。え。な
 離。鷓。を。索。ひ。と。穿。え。先。當。分。の。凌。の。為。斧。柄。が。赤。子。の。乳。名。と。玉。五。郎。と。命。け。せ。
 釘。六。許。遣。し。其。老。婆。ハ。字。音。を。れ。聊。心。安。堵。是。よ。の。後。梅。雪。信。女。の。為。香。と
 焼。花。と。賻。け。看。經。日。と。送。る。程。も。三。七。日。あ。る。さ。り。け。當。日。浪。速。の。陣。館。も。召
 る。と。穿。え。く。敬。篤。に。喪。服。と。脱。て。這。地。ハ。來。つ。夏。の。顛。末。長。々。と。飽。れ。や。ん
 要。る。身。上。話。説。ふ。と。の。果。て。歎。息。九。四。郎。ハ。執。六。共。侶。ハ。哀。れ。人。の。家。

艱と今ゆら慰難て屢嗟嘆あつける。當下落葉の項小楸の紐と延考財囊とあ
 めて主人夫婦示してのやう前も告するのやう。這箇金二百兩の朱之众の為不調達
 他不遞與あ一開が内中と五面秋他使ひの。残る二百九十五金の這財囊の中あり。今日
 陣館より賜りて故へ復一金子るが。嬉しと思ふ。おの心似ざりても知るはる
 ぐ。朱之众が醸する禍鬼お拘りらひて乙藝刀自ら乾兒達と疑獄お敷かれり。御
 活業三禁められる東西の没女のよりけん然ると朱之众を憎ともせ。他不盤纏と取
 せと賢弟とて趕せぬ。九四郎主の任侠の有か。此の報をせむもあら
 這地へあつる甲斐文へ願ふ御夫婦這金子と受納て足すの弗費お充せぬか。とい
 財囊と合抗て遞與せ欲すと九四郎いふ。たふ觸せ推戻し且のやう開い思ひ
 ける。其金受て何おせん。御身を朱刀袷小袋層の鈔を没れる。那人都て支をた遂
 び開が上お令愛の不幸の没女もさあらん。其儘をたかて。佛事お用ひの縁と

推辭め乙執も俱小のや。如如来様ののらあ。這里お人のの者あり。其活佛の引接と
 美のひの御息女様の孝順貞愛と御身の慈善の故おとあらざらぬ。其及ぶ
 あらねども九四郎が任侠する人お東西と施いまれ然るた故お人さあらぬ。東西と受は
 ろのゆら開と云と強め。憚りあつる人を知りぬ。故おを伝らぬと辭ふ。落葉推
 復してその其該でゆれども。目今い一情由な。枉て受させぬ。又其磨る。毫由
 名夫婦齊一固辭の。遣ら返ら果一なけれ。落葉の口得件の財囊を開。儘倒
 図に憶お落る感涙と袖お握せ。又のや。思ふお増て誠ある御夫婦の方正お負て本
 意をゆらか斯ら。心裏恥し死不問語おゆれども。這金子と有餘游財あるを
 か。朱之众をせおささ。思ふお内百兩の他借し。他不遞與あ。その亦空お
 切て御身御夫婦と舍弟達二柱の恩愛お報ひまらんと思ふ。おの寸志おゆれ
 開も听れぬと争何へせん。知せぬらぬとるが。奴家が伊勢の津お在り。時故の良人お偶

其の家も子も忘る。まふ色不惑ひて。錢財湯水の如く使捨る。其後妻小生
甘との朱之入由父似て。多しを悲しけれ。是も就ても思ひぬ。奴家が實の單
乙袖の僅小五歳の時生別と二十稔有餘絶て信る。一近曾朱之入が話説老創
めて歩知る他が薄命名と小夏と歎喚更られて。継母のふ養れ華の洛陽も身
杪枯の果敢る世渡りあて在り。小親の京師小住托け乙袖が九歳より。秋男女兩個
の子と推方て夫婦鎌倉へ赴道中。捐鍼山巔と踏る折山豪小撞見て。木偶主命
喪ひ乙袖の小夏の谷底へ投棄されて。陽炎の命穿く做り見と。少折胸淡れて哀
さ涯のるりける。遮莫其折朱之入の年云秋るれ。夏の光景と覚ねも。年園て母親
阿夏の夜話少少と告られれ。實るべし。其哀悼袖濡て。乾ぬ小谷柄を。命
短く子との遺して。先あたれ。千萬の金ありとも。何かせ。寄処る。這老の身と慰め
せ。御夫婦達情強や。とむる。憶む財囊と投捨て。と泣く。伏沈ぬ。九四郎るを。

又此で黙然と開ぐ程。小乙藝の涙雨の如く。同じ浮世の笠宿り。夕立。天のあつねも。
曇や胸小思ふ。のりまされ。悲しさと。致し。一糸濡る袖と。絞もあむ。身と倚せ。落
葉が林と拊下し。又拊下して。喃御懷様。今宵。緯の趣。俺身小思ひ。合まる。あ。御
身の故の對偶の伊勢の阿濃る。町人。木偶。主と宣ひ。其屋簷の末松。あて
袖の小夏の奴家小侍。と名告る。落葉の敬馬。頭と拾げ。左見右見て。原
其方の俺女兒乙袖。一飲。煮られ。他九歳より。時。冤家の為。小千の谷。投落
され。と歩る。小世は存命である。べし。や。あ。あ。か。と。訝れ。九四郎。然。と。膝と。找め。
其疑ひの理の。俺身。總角。り。比。二親。小。少。と。あ。の。言。言。く。と。も。詳。小。告。て。御。身。死
惑ひ。と。解。ん。抑。俺。父。へ。ける。年。張。九。四。藏。中。原。通。世。の。原。是。信。濃。の。一。諸。侯。木。曾。氏。の。家
臣。り。小。壯。年。の。時。故。あり。て。致。仕。く。宅。眷。と。推。方。て。浪。速。小。程。来。く。ト。居。る。兵。法。武
藝。と。人。小。教。て。左。も。右。も。と。あ。り。ける。程。小。永。正。九。年。八。月。の。時。候。舊。里。小。要。事。あり。て。一。僕。と



三

九四

あつ

三

十

三



朱之介

悲泣の雨り
て落葉財
囊を擲り

あつ

三

三

い 将て山峯張の岐路に赴きける其比搦鉞巔中折々山賊の禍ありて...
藝云ふ支足る元自謹慎其身と愛する故に敢危なき近き其往折中遠る中件の高嶺を
上下せし案内知らざる上るれば樵夫の通ふところ山脚路に分入りて荆棘を踏啓溪水を渉りて
辛くしてかりまゝ程の日の既傾れ比前面より来る一個の僧ありけり頭中櫛笠を戴
て背に駝鞍を網代の髪より錫杖を携ふる其形容飄々然として面色も亦凡るも其鳥の
細路相譲んとて過ると候程件の僧歩も停りて俺父向ひて云々。這里より西るる
溪松の邊に賊難危窮の童女あり他の和殿親子も過世ありて必娘も做るべし者今勉て那
死を救へ後小幸多かりん是を用ひて死と起しぬと説示し懐より合巻を一貼の薬を與て
答へ候と飄然として過り思ひにけるに俺父奇異の思ひを做すも然りと
疑ひしと一所有餘ふと見れば老る政松の溪水の上指せらる木杖の夾れて死する
如く一個の童女あり是るべしと思ふと伴當と共侶の脛の濡るるを敷き置る近づくに

見れば那身小癩いり。せむ推揚て抱合多。昔の処退て草と折布に臥せり先四下と
見ると其頭小冤家のあり。又其童女と見ると年八九ありて敗る考の
夾衣と壺折て藍染るる仁田山紬の帯に申時をりるを端短に結做して小腕被足
小脚絆小形の草鞋を穿し旅も賤女と猜せらる形貌を斯宴れえ容
顔醜かられ痛すいの一入也其脈と診み絶方如く有ふ似う。射て件の散薬を
中へ揮入れ。溪水と掬て扶下あり主僕カと勅せて勤る程件の童女は稍息して死さ
るるとはれもののみまを至ね。只得伴當搭駝せ。其夜歇店に就てを創て可知
る他が素生と名と小夏と喚れる事云ふ。父も亦継母も稚弟も山家小屠ら
と命とや預りけ。恙あらずや知らねども外に親族とともるは夏身と憐愍めい種と
泣口説れて俺父のよく捨がと思ひあり尚見る由あらん状と他が護身裏を檢まゆ
臍帯あれも父母の名と寫さむ。其の餘は皇大神宮の離太麻と除厄弘法大師の

三十一

十四

御影ありあふ至て俺父の跋然として思ふや。原来那の僧の必大師の化現を伊勢の御
 神の擁護もあるべし。を疑ふ不仁似たり。と深念とある。并に儘小童女を浪速へおてかへ
 了て俺母小告一が母も慈善の本性なれば相憐て乙誓と名づけて。目縫刺何れと教
 導に慈と慈む恩愛の俺女兄より。億禄やも異なる。徳而二親世と去て後送言
 且ばそが儘乙誓と妻あつふこそと一五二十と説示せば乙誓の儘小涙を飲め。肌
 膚層護の囊と開けて合ふも臍帯の包紙と拵伸してや。喃奶々。這紙小。永正元年
 甲子の冬十二月三日の誕生乙袖が臍帯とある幾文字の御身の跡で伝ふ。相別
 去の五歳の春まで生平お奶さると喚一の。實の御名の顔色もふありけん。覚
 況御身の親里の伊勢大和知ざれば。年七八做一比并と答々小問一かと思ひあり
 けん実と告む。汝が實の母親の相別一比身故りお開と問ふと。彼と叱られて。哀一か
 思ひまや父の身と刺損鍼の山巔と死天の山豪ふたれぬ。いと知る。過せ十九年環會

目のあらん様とて空瀬とて新推る鎌倉もく人の言傳遣一申非る。其存亡の反
 覆也。世のる人と思ひぬる奶々の今も恙なく。過世吉野小程遠くぬ。上市の里と云
 多。料らば名告會も。這飲ひ就て亦最法も死ぬ。比這里小宿せ。朱之の異
 母る俺弟珠之次とて送ふ。知らぬ。知る。俱小獄舎小敷系れ。身免れて。成り
 他の。單追放の往方も知らざる。けの。現小善惡の報も。思へ。不便なるか。と云
 葉の泉。做ま涙小鼓耳の口龍とて。現小理の。俺も亦。又後憑。思ひ。芥柄の。及。短命
 中。死せると。其方の異なる。環會ける。現小夢の。幻。秋。量。知。れ。生。死。の。海。と。山。嶽。小
 老樹の。櫻。枯。る。枝。小。開。く。花。の。二。重。八。重。九。歳。の。秋。も。受。一。屋。主。の。再。生。の。恩。と。思。ふ。事。
 慰め。慰。め。られ。送。小。合。令。れ。向。上。直。下。高。對。の。肯。言。と。今。心。憑。目。自。昇。鏡。小。照。照。す。事。
 現。小。争。れ。親。子。の。照。据。鬼。神。不。測。の。再。會。と。俱。小。教。九。四。郎。も。只。管。感。嘆。と。す。け。の。
 新局 玉石童子訓卷之三上冊 終

新局玉石童子訓 淨書画工刷人目次

出像畫工

一陽齋後豊國

淨書筆畊

谷 金

澤 正次代稿

離 彪、新 話 中本 三卷

この海八翁の舊作山中系、及後繪卷の
翻案せらるるものあり、初編近刻
羨想兵清胡蝶物語の拾遺、下二巻、前以て
放ちが、る滑棹、契余の奇書、初編十冊内五冊近刻

開卷驚奇俠客傳第五集十冊近刻

この編更、小玉石童子訓と名づける玉石の善悪邪
正の由り、素より架空の寓言と、久しむ童蒙家婦女
子とく、續味あると、死の覺えを、一と、獲善の域、
入る禪、益なりと、と、さうさ、さうさ、と、の、
全編五巻分、十冊、と、今、刊、刻、成、所、の、五、冊、と、發
板、下、帙、五、冊、も、續、て、刊、行、を、へ、と、四、方、の、看、子
全編皆成の折と俟多々、 文溪堂敬白

○家傳神女湯 一包代百銅
○精製奇應丸 大包中包小包共、
最上の茶種を、
製法、
弘、
右、
一包代五、
一包代六十四文
瀧澤氏
た、
弘、
右、
一包代五、
一包代六十四文
瀧澤氏
た、

作者 澤 清右衛門

弘化二年乙巳春正月吉日開板發行

心齋橋筋博勞町角

河内屋茂兵衛

大坂書肆

心齋橋筋南久太郎町

秋田屋市兵衛

江戸書肆

大傳馬町貳丁目

丁子屋平兵衛板

